

平成 13 年度 灘のけんか祭り

松原八幡神社秋季例大祭



~ 妻 鹿 ~

14日・15日 - 神社楼門前

・八家の屋台が鳥居のところに行く

さあー観衆の皆さんいよいよ妻鹿屋台の登場です。

今朝の午前5時、妻鹿町では総代さんはじめ祭典役員や若者代表らが、松原八幡神社の「久津理社(くつりしゃ)」にお参りし、安全祈願をしてから練り出し、神社にやって来ました。妻鹿の宮入を見ずして、この祭は語れません。

獅子ダンジリに続き、勇壮な屋台が神社楼門に勢い良く走り込んでいきます。

神社前の皆さん、非常に危険ですので 楼門前を広く開けてください。

はるか昔、妻鹿の漁師の長(おさ)久津理(くつり)が、妻鹿の沖で拾い上げた九州、宇佐神宮の紫壇の霊木、八幡さまを松原八幡神社にお祀りしました。この「久津理(くつり)」伝説や、今から約1000年前平安時代の長保(ちょうほう)2年、その時代、神社を兼務していた八正寺(はっしょうじ)の放生会(ほうじょうえ)を妻鹿の人がはじめて行った故事から妻鹿の人たちは、この秋祭りを「妻鹿のけんか祭り」と、誇りをもって呼んでいます。

妻鹿町では、計画的に屋台の装飾品を新調しました。中でも、高覧掛けは郷土にゆかりの深い、武将の勇ましい合戦図を描いています。この祭りの渡行の原形と伝わる、米俵200俵を神社に寄進した赤松政則。妻鹿城の初代城主・妻鹿孫三郎。知将として有名な黒田職隆・官兵衛親子。謡曲「黒田武士」のモデルの母里太兵衛。この4人の中世の武将を、よくご覧ください。

聞こえてくる妻鹿屋台の大太鼓の音は関西一と言われていています。妻鹿には江戸時代の太鼓が2つありますが、今年使っている大太鼓は、今から374年前の江戸時代はじめ、徳川家光が将軍であった寛永4年(1627)に作られた、櫂(けやき)の胴に、今年、革を張り替え、使っています。

・獅子の宮入がはじまってから

獅子の大幟を先頭に獅子ダンジリが入ってきます。妻鹿の毛獅子、神社楼門をくぐり、一気に拝殿めざして走り込み、宮司からお払いを受けます。

・屋台の動きを見ながら・・・元気良く

妻鹿の屋台を見てください。

松下総代を中心にシデと練り子が一体となり、人の波が怒涛(どとう)のように、押し寄せて来るような迫力は、他の地区を圧倒する妻鹿屋台の堂々とした宮入です。

妻鹿屋台は総檜(ひのき)づくりで、大きさと重さは旧7カ村随一です。なんと言っても妻鹿屋台の特長は「胴つき」でしょう。屋台の重さはおよそ2.5トンと重く、屋台を練り上げる時、シーソーでは上がらず、「胴つき」で傷めた屋台や泥台を、大修理しています。地響

きのする「妻鹿の胴つき」は、屋台が遠くにいても、迫力が感じられます。まねのできない、妻鹿屋台の「胴つき」をご覧ください。堂々として、見る人に重量感と威圧感を感じさせます。これが世に言う、妻鹿のけんか祭りです。

妻鹿の屋台練りを存分にご覧ください。以上で、妻鹿説明を終わります。

15日 - 広畠

・中村の屋台が広畠で据え、妻鹿の幟が広畠入り口で

妻鹿の屋台が広畠に上がってきます。危険ですから、登り口を広く開けてください。

・状況を見て・・・元気良く

さあー、いよいよ、妻鹿の屋台の登場です。聞こえてくる妻鹿屋台の大太鼓は、関西一と言われていています。妻鹿には江戸時代の大太鼓が2つありますが、本宮の今日、使っているのは、374年前の江戸時代のはじめ徳川家光が将軍であった寛永4年(1627)に作られた櫓(けやき)の胴に、今年、皮を張り替え、使っています。およそ、380年前の太鼓の音色(ねいろ)を楽しんでください。

妻鹿の屋台は総檜(そうひのき)づくりで、大きさと重さは旧7カ村随一です。なんとと言っても妻鹿の屋台の特長は「胴つき」でしょう。屋台の重さはおよそ2.5トンと重く屋台を練り上げるときシーソーでは上がりず、「胴つき」をして屋台をあげます。地響きのする「妻鹿の胴つき」には迫力が感じられます。

・一段と力強く・・・

皆さん、豪華絢爛な妻鹿の屋台が、大幟を先頭に、シデに囲まれ練り場に入ってきました。先頭で舞っている毛獅子は、次の獅子の立ち舞いを披露しています。松下総代を中心に、シデと練り子が一体となり、人の波が怒涛(どとう)のように押し寄せてきます。この迫力、他の村の屋台を圧倒する妻鹿の屋台の広畠入りです。

豪華な屋台に勇壮な屋台練りこれが「妻鹿のけんか祭り」です。存分に妻鹿の屋台練りをご覧ください。以上で、妻鹿の説明を終わります。